
Piece to Peace

パウリの甥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Piece to Peace

【Zコード】

Z9188Z

【作者名】

パウリの甥

【あらすじ】

一人の麗しき女性を巡って四人の男たちが踊る悲喜劇・・・

感情では足りなくて、理性では語れなくて、本能では知ることのできない・・・何が正しく、どうしたら赦されるのだろう?

本作品は志保さんを中心とした逆ハーレム(?)なお話です・・・
このような設定、もしくはキャラクターの描き方が受け入れられな

いかたはまわれ右を推奨します・・・

Scene 1・0・現と夢（前書き）

勢いで書いてしまった連載ものです・・・こんな作品を読んで頂き有難うございます・・・ただし、作者が筋を確定していないのでどんな物語になるかは皆さんのご意見や感想等で大きく変わるかもしれません・・・

では、どうぞ・・・

Scene 1・0・現と夢

” 桜の花びらが吹雪のよひで舞つ中で、僕は彼女に恋をした・・・
”

” それは、世界の理をいやそんなものではない自分の価値観そのものが揺らいでしまうぐらいのものだった・・・
”

” 月並みの言葉しか思い浮かばない・・・けど、彼女の為になら何もかも捨ててしまつてもかまわないとそう思つたんだ・・・
”

” 世の無情さを知り、日々のモノな生活に浸るとそんな理想などケーキの上にまぶしたパウダーシュガーのよつに傍く、またほんの少しの因子で崩れ消え去るものだ・・・ならば、己を大事にして己の為に生きるのが賢く、また利にかなつてゐる。
”

” なら、声を大にして叫ぼう・・・彼女が僕にとつての”世界”
であり、全t・・・

「あら、新しい作品の下書きかしら?あなたにしてみたら、随分

と可愛らじくて素直な文章ね・・・

女はいつの間にか、俺の後ろに来ていたようだ・・・。いつこう気配を消すところや皮肉をいうところは最初はあまり好きではなかつた・・・。ただ、時を重ねるうちにそこすらも愛おしいと思つてくるのは何の幻覚作用なのだろうか？そうして思わせぶりな態度を口調の端々に込めて、柔らかく甘美なそれでも行く先は生き地獄・・・ともいづべき白き肢体を俺に擦り付ける・・・媚びるようこ、または俺を憐れむように・・・。

とある大都市の繁華街に君臨する、翡翠の女王・・・。人は彼女のことをこう云つ。まるで、この世の男は自分の為にありそれは一重に奉仕するだけの存在・・・と言わんばかりの不遜で、高飛車で・・・けどそこには高貴と、怜悧が相まって・・・。単なる女の枠を超えている、ある意味規格外の人間だ・・・。

その容姿に惹きつけられる奴が大半だが、中にはこのビリショウとかるかあ～平成の「ナン・ドイルさん？」

そういうえば、同じ作家仲間の服部は

「あの、ビリショウもな「ぐら」のシンデレバリがええなん？わかるかあ～平成の「ナン・ドイルさん？」

そもそも、同じ推理小説家のクセして「最近、売れ筋がエエから

の「」の一言でラノベ作家に転向しやがったアイツは殊、ツンデレやらヤンデレやらと女性を何かの型にはめようとしている・・・これも、奥さんに先立たれてしまい男手一つで息子を養わないといけないからなのだろうか・・・

昔は、小説家の大家でもある父親を超えてやると息巻いており一心不乱に作品を書いていたのはよかつた・・・ただ、父親を病で亡くしてからは目標と目的を失い酒量も増え自棄になる一方・・・それでも、奥さんの和葉さんは上手くいっていたようだが生来、身体が弱かつた彼女は一人息子を産み落とすと残されていったこの色黒男を心配するように世を去つて行つた・・・

それから、件の歓楽街に繰り出し色々悪い噂が絶えない中その「彼女」に出逢つたそうだ・・・

それから、崩れるのはいつも簡単だったそうで・・・と”彼女”は事も無げに語つた・・・

俺は、最初は服部をそそのかしたのはこのオーナのせいだと決めていた・・・確かに、酒におぼれ誇りも夢も失いはしたがけど自分の信念を捨てるはずがないとそう思つていた・・・

なので、俺は単身あのオーナの”拠点”に向かつていったのだ・・・

・

・・・・・きて、・・・・・びひくん・・・・・起きて、・・・・・

靄がかかつているみたいだ・・・・・意識が浮上することを本能で
拒む・・・・・

「起きなさい、工藤君ーー！」

はつとなり目を覚ます・・・・・白い空間にポツンと置かれたダブルベッドとサイドテーブル・・・・光が遮光ガラスすらも透過してい

るのではとこひぐりい光がこぼれている・・・

・・・・・夢？・・・

「起きなさい、工藤君？今日は初日でしょ、脚本家がいなければ舞台はばく破算になるわよ・・・」

「翡翠の・・・女王・・?」

「は？何寝ぼけているの工藤君？それとも、頭の中はもう仕事モードな訳？江戸川センセイ？」

「あついや・・・・・済まない少し寝ぼけていたんだ・・・志保・・・」

・・・

「ひょっと、昔馴染だからといってファーストネームやめてくれるかしら？それに今は何もないでしょ？工藤君・・・」

「つああ・・・・昨日は夜遅くまで有難うな・・・若手実力派女優さんの意見も聽けてよかったです」

そう、彼女・・・宮野志保。芸名、灰原哀。モデルから始まって、その姿を見る者を惹きつける雰囲気と卓越した演技力で既に二十代初めで実力派女優の仲間入りをしている・・・その他を圧倒するオーラと理知的かつ聰明な眼差しから彼女のこと、「翡翠の女

帝「や、「極東の至宝」と……まあ、有りがちな表現では足りない
ぐらいの通り名や惜しみない賛辞が与えられている……

そして、オレにとっての初めての女性だつたし初めての相手でもあり……これからも変わることはないだらう……

オレ、工藤新一と宮野志保、そして高校の同級生だった黒羽快斗、
大学の演研で知り合つた服部平次は昔からの俳優仲間だつた。ただ、
オレ一人演劇の才に恵まれなかつたこともあり今は脚本家でなんとかこの世界に残つている……

ただ、オレが俳優をあきらめ脚本家になつて暫くして志保との距離
は遠のいていつた……今では脚本家と女優という細い繋がりだけ。
・・・

Piece to Peace - Scene 1·0 : 現と夢

Imitation to Truth

この前の打ち上げもそうだったが先の二人に加え、一世俳優の白馬なんとかといいやつも彼女のことを虎視眈々に狙っていた・・・。共演者しかもヒロインとその相手役ということもあります確かに、二人が会話をし微笑み合っている姿は「様になっている」し、誰からみてもお似合いな二人でもあった・・・。

「ほんと、白馬のヤローーあんなに志保ちゃんべつたりで・・・」「なら、お前がアタックすればええのに?のう、工藤?お前からもなんか言つたれや・・・」

「しりねえし、興味もねえ・・・そもそも、オレはアイツのモノでも無ければ、アイツはオレのモノでもねーし・・・そもそも、雛森代議士の娘に手だしたお前が言えて、ギリかよ?デキちまつたんだろ?」

「やつやつ、聞いてよねえ新ちゃん……それがヤ、見てよこ
れかわいだ

「先も言ったが、こんなモノクロ写真でわかるか？そもそも、まだ
生まれてもいないのに言えるか…」

「新ちゃんのいじわる…・・・・・・けだし、新一・・・お前はそれ
でいいの？」

「そりやで・・・・」のままだとオレがアタックしてまうで～それで
ええのん？」

似たような顔立ちの男が、オレを諭すように言つ・・・・分かつて
るや、そんなこと・・・けどオレの一方通行おながいだけではダメだらう・
・・彼女も呼んでくれないと・・・

・・・・・けど、オレはあの時・・・・・

・・・・・志保の一方通行をはねつけてしまった・・・・・

「・・・いいんだよ、別に・・・」

新一はグラスに残っていたカクテルを空虚な胃に無理やり流し込んだ。アルコールと酸味の利いた風味が胃を刺激する。この嘔吐感

や胸だけは果たして、生理的なものだけなのか？それとも、・・・

胸に去来する何とも言えない想いを酒精と快楽で塗りつぶせたら
どれだけ楽になれるか・・・

答の見つからない、不毛で虚しい自問自答に蓋をしてラウンジのガ
ラスに映る人工のランタンの灯りをただ見つめるだけであった・・・

・

「志保さん、今晚はどうです？」の後、いい感じのバーがあるの

ですが、一緒に来られますか？」

「白馬君にしては、安易でストレートな誘いね？いいのかしら？
結構、イケる口よ、私？」

軽くウエーブのかかった赤茶けた髪をさつと指に絡ませて後ろへ流

す・・・さりげない所作にも優雅で気品が溢れていて・・・昔の
人の人を彷彿とさせてくれる・・・やはり、彼女は僕にとっての・

白馬探が彼女と出会ったのは映画作品での共演だった・・・自分は、志保の恋人の恋敵役を演じたのだ・・・その演技が認められその年の映画賞の賞という賞を独占し、一世俳優という偏見じみたレットルをも覆したのだ。ただ、白馬自身はよく自覚していた・・・それは、あの時の素の自分をありのままにを見せただけで演技などというものは遠いものだったということを・・・

過去に縛られるのも悪くはない・・・いや、今も僕は引き摺つている・・・けど、今はこの状況に身を委ねたい・・・

それが、たった一時の安らぎであっても、彼女に向いているものが愛情ではなく哀情であるということを・・・

秀麗な目をつぶり、今浮かんだ考えを瞬時に消し去ると笑みを向ける・・・聰明な彼女にはすでに気付かれているかもしない。偽りの思慕、偽りの眼差し、偽りの微笑・・・それでも、いい。

僕は、道化師・・・操り手は自らの感情・・・その役は深い哀情・・・

それから、志保と白馬が交際していることが大衆紙に載つたのはそれから三日後のことだった・・・

人間、習慣づいてしまったことは判を押したが如くそこには感情の余地も一切いれずただ黙々とこなすことができる。例え、寂寥感に満たされても焦燥感にかられようとも社会という大帝に奉仕する従者となり今日も与えられた仕事を消化する・・・

そこに生きる価値を見いだせる人もいる・・・ただ、それはほんの選ばれた人間にしか過ぎない・・・やはり、大半はモノな世界に飽き、悩み、絶望し最後は思考を失う・・・

果たしてこの男は何を思つて今洗顔をし、思い人でもそうでもない人間の作る朝食にありつこうとしているのだろうか・・・それは、過去の陰惨な経験なのかそれとも取るに足らない砂上の虚栄心なのか・・・

穏やかな朝日の中、ダイニングには煎ったコーヒー豆の芳醇な香り、トーストの香ばしい匂い、フライパンの上をはぜる水分の音で充满

している・・・男は、テーブルの上を一瞥する。昨夜あつたはずの大量の資料と校正したての脚本の山、仕事道具でもあり彼女から贈つてもらつた唯一の品であるヤード・オ・レッドの万年筆がどこへいったかと一瞬驚いたようだつただが、

「仕事道具なら、あなたの仕事机に置いといたわ。それと、昨夜の議論はちゃんとまとめといたから。ちゃんと目を通しておいてよね。それより、早く朝食を食べて頂戴。本当に遅刻するわよ。」

いつも、自分の足りないところをさりげなくフォローもしてくれるそれにそつ無く何事でもこなせる・・・まるで、自分の欠けた半身であるかのように必要な彼女・・・でも、

「そろそろ、あなたもアシスタントを雇つたら? そこの有名にもなつたんだし・・・」

彼女は呼ばない・・・その声も霧散して意味をなさない・・・どうして、アイツなんだよ・・・

「もし、必要なら私から紹介するけど」「オイ、どうにうつもりだよ?」「工藤君?」

「どうしてなんだよ? なんで、オレの名前を呼ばないんだよ!...オレはここにいるのに!」「違うわ!...」「志保?...?」

気が付いていたらオレは志保の手を思いつきり掴んでいた・・・・・白くて陶磁器の様な肌・・・そして小枝細工のように精緻ではかなぐ壞れそうなほど腕を・・・・そこは見る見るうちに紅くうつ血する・・・まるで、己の存在を自己主張せんがために・・・それで、分かつていてオレはやめなかつた

・・・・・

「・・・・・あなたは、変わった・・・・それがまだ分からぬの？」

けど、オレが大事にしたいアイツは・・・泣きもせず唯じつとオレを見つめていた・・・・

その瞳には、怒りの感情とも悲しみの感情とでもなく・・・・・ただ、独り考え苦しみ抱え込もうとしている眼だつた・・・・・

「・・・・・朝食、冷めないうちに食べて・・・アシスタンントの件は私が妃先生を介して紹介しておぐから・・・・・」

気が付いていたら、コーヒーの湯気も消え去り温かみがある白い印象派絵画もじす黒い陰惨とする前衛芸術へと変貌していた・・・それに一瞥をしため息をするとトスクに整頓された資料を無造作につかみ黒革のくたびれ鞄に詰め込んだ・・・

そして、オレの気持ちをじ丁寧に代弁した冬の寒空のもと飛び出した
といった・・・

scene 1・0・現と夢（後書き）

前作に引き続かず、またもや見切り発進で・・・自分の馬鹿を加減にまじめと味れるばかりです・・・

ほのぼのからこきなりのダークシリアルス、セレニティをトシピングした感じに・・・

したい、と思つています・・・

さてどうなる」とやうに。作者である自分が一番緊張感なく、責任感が無いかもしけない・・・

「意見・感想等たくさん待つてまーす！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9188z/>

Piece to Peace

2011年12月28日20時57分発行